様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６７７００７９

研究課題名（和文）近世武家社会における関ヶ原合戦関連軍書の研究

研究課題名（英文）The study of GUNSHO related Battle of Sekigahara in the early-modern samurai society

研究代表者
山本　洋（YAMAMOTO, HIROSHI）

金沢大学・国際機構・准教授

研究者番号：５０５８３１６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では『関ヶ原軍記大成』に引用されている書状類の出典に関する調査を行った。また、全国15の所蔵機関等において、『関ヶ原軍記大成』および『関ヶ原軍記大全』の網羅的調査を行い、体系的な分類を行った。その結果、本書は大きく分けると二種類あり、序文についても二種類存在することが確認された。また従来正徳三年とされてきた成立年代についても、最終的な成立が正徳六年であることなどを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, I analyzed the Historical material which is quoted in “SEKIGAHARA GUNKITAISEI”. Based on the results of the analysis, I further made a comprehensive survey at 15 historical materials preservation houses. As a result, there are two types of this book as with the foreword. Moreover, unlike the commonly accepted theory, I clarified that this book was compiled in 1716.

研究分野：日本近世文学　日本近世史

キーワード：関ヶ原軍記大成　軍書　関ヶ原　黒田　吉川　戦国軍記

１．研究開始当初の背景

『関ヶ原軍記大成』は関ヶ原合戦を題材とした軍書としては最も詳細かつ大部なものであり、関ヶ原合戦に関する軍書のなかでもっともよく知られた軍書である。それゆえ、関ヶ原合戦に関する通説の中には『関ヶ原軍記大成』に由来するものが数多くある。しかし『関ヶ原軍記大成』の成立に関しては不明な点が多い。

例えば、成立年代についても、既に刊行されている国史叢書本『関ヶ原軍記大成』では、本書の成立を正徳三年（1713）としているが、報告者の研究によりこれ以降も引き続き加筆修正が行われており、右の成立年は妥当では無いことがわかっていた。また、本文中に引用されている多くの書状類についてもその典拠が明らかでないものが多く含まれており、諸本についての研究も全く行われていない状況であった。

そこで、まず『関ヶ原軍記大成』がどのような性格を有する軍書であるのかを明らかにするため、成立年の特定、および諸本間の異同を含む、記述内容の分析について検討するところから本研究をスタートさせた。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の三点である。

（１）『関ヶ原軍記大成』編纂の実態を明らかにすること。

（２）『関ヶ原軍記大成』の諸本間に見出される記述の異同について比較検討することにより、諸本の成立年代を特定し、体系的分類を行うこと。

（３）上記二項目によって得られた成果をもとに、『関ヶ原軍記大成』を典拠とする通説の信憑性について再検討を行い、著者である宮川忍斎の歴史叙述の意識について考察を加えること。

３．研究の方法

本研究では、まず『関ヶ原軍記大成』に引用されている書状類の出典を明らかにした。併せて、著者である宮川忍斎が史料を収集した範囲、および情報源についても藩政史料を用いながら検討を行った。

次に全国の図書館や史料館に所蔵されている『関ヶ原軍記大成』『関ヶ原軍記大全』の残存状況を網羅的に調査し、それらを掲載史料や文言の異同をもとに体系的に整理し、宮川忍斎が史料を収集しつつ増補改訂を繰り返していった経緯を検証した。

本研究を通じて、調査を行った史料館等は下記の通りである。

『関ヶ原軍記大成』
岩国徴古館
九州大学付属図書館
九州大学記録資料館
京都大学図書館
小浜市立図書館
和歌山大学図書館
国文学研究資料館
北九州市立図書館
福岡県立図書館
秋月郷土館
宗像高校
岐阜県図書館
米沢市立図書館
茨城県立歴史館
群馬大図書館

『関ヶ原軍記大全』
京都大学図書館
小浜市立図書館
和歌山大学図書館
岐阜県図書館

４．研究成果

本研究では平成 26 年度から 3 年に渡って、前述の 15 の史料館等において『関ヶ原軍記大成』、および『関ヶ原軍記大全』の諸本の閲覧・撮影、および書誌情報等の検討を行ってきた。

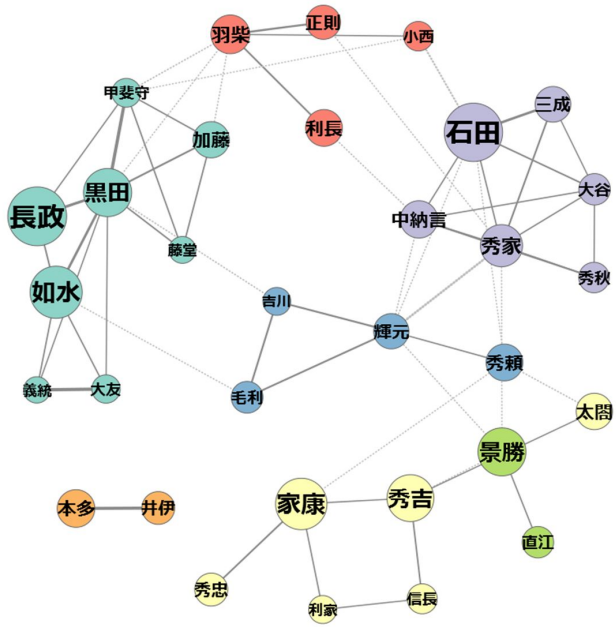
その結果、『関ヶ原軍記大成』の諸本は、大きく分けると二種類あり、序文についても二種類存在することが確認された。すなわち、国史叢書本では、竹田定直および著者の宮川忍斎が序文を記しているが、報告者が調査した限りでは、右の両名に加え、櫛田巨源、児島景范、島村叔謙が序文を記したものの方が多数伝存していることが確認できた。これは、成立時期の違いであり、正徳三年から正徳六年にかけて増補・修正される過程において序文が書き加えられた物と考えられる。よって、従来先行研究において正徳三年（1713）とされてきた『関ヶ原軍記大成』の成立年代については、以上の点、および追記された序文の内容から最終的な成立は正徳六年（六月二十二日改元　享保元年）であることが判明した。

報告者の従来の研究により、『関ヶ原軍記大成』は正徳六年の段階で板行を前提として編集作業が進められていたことがわかっているが（「『関ヶ原軍記大成』所載の吉川家関連史料をめぐって」『軍記物語の窓　第四集』2012）、板本は確認されておらず、写本の形で流布している。従来、報告者はこの事実について、享保年間に出された出版統制令との関わりから理解してきた。

しかしながら、本書の成立が正徳六年ということになれば、著者宮川忍斎が死去したのが享保元年 11 月であること、そして徳川家継の死去に伴う吉宗の将軍宣下が同年 8 月であることについても、その影響について考慮する必要があろう。

以上は、本研究で明らかとなった内容の一部であるが、これらについては論稿の公表に向けて執筆を進め、また公開講座などにおいても研究の成果の一部を発表した。

また、本研究の最終年には、当初の研究予定には入っていなかった、「計量テキスト分析を用いた戦国軍記研究」の試みも行った。



上図は、『関ヶ原軍記大成』の主な人名をもとにした共起（共出現）ネットワークである。この図では、出現頻度の高い単語ほど大きい円で描かれ、共起する語彙間（関係性の近い語彙）は線が太く描かれる。

すなわち、この共起ネットワークから、関ヶ原合戦の主要人物である家康、石田に加え、黒田如水(官兵衛)・長政父子の名前が特に多く出現していることが読み取れる。これは著者で或宮川忍斎が福岡藩に仕えた人物であり、執筆の際に黒田家の事績をとりわけ多く記載していることに由来する。よって、黒田如水(官兵衛)・長政父子が本書において頻出することは当然のことではあるものの、本手法を用いれば、仮に本書に関する書誌情報がなかったとしても、黒田に関係のある軍記であることが推測できるのである。

これは従来戦国軍記研究においては用いられてこなかった手法であり、本書に限らず、成立年代・著者等の未詳の戦国軍記の性格を明らかにする上でも、有用なツールとなることが確認できた。本研究を通じて、右の研究

手法を用いた新たな研究テーマの設定に至ったことも貴重な成果と言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2 件）

①山本　洋、「毛利関係戦国軍記の系譜―計量テキスト分析を用いた戦国軍記研究の方法論―」、関西軍記物語研究会第 89 回例会、2017 年 4 月 23 日、於：京都府立大学(京都府京都市)

②山本　洋、「江戸時代の軍書からみる関ヶ原合戦―史実と虚構―」、金沢大学公開講座、2016.9.18、於：金沢大学サテライトプラザ（石川県金沢市）

〔図書〕（計 2 件）

①山本　洋、「吉川広家－「律儀」な広家像の形成と展開－」、『アジア遊学』、勉誠出版、2017

②山本　洋、「『陰徳太平記』の成立事情と吉川家の家格宣伝活動」、光成準治編『吉川広家』、戎光祥出版、2016、pp.231-258

６．研究組織
(1)研究代表者

山本　洋（YAMAMOTO　HIROSHI）

金沢大学・国際機構・准教授

研究者番号：50583168

(2)研究分担者

該当なし

(3)連携研究者

該当なし

(4)研究協力者

該当なし